B 128　江戸後期小袖の裏模様

日本女大家政　○大久保春乃

目的　「裏模様」とは、江戸時代後期の女性の小袖に流行した、模様配置の一形態である。現在の服飾史では「裏模様」は宝暦から明和頃に起こったとされ、その背景には幕府の衣服規制とそれに伴う小袖模様の下降現象があげられている。そこで本論は、流行の正確な時期や表地との関係等「裏模様」の実態を調べると共に、そこに反映された当時の人々の意識を明らかにするものである。

方法　文献資料並びに絵画資料を用いた。文献資料としては享保年間より幕末に至って記された随筆、及び浮世草子・黄表紙・洒落本・滑稽本・人情本といった庶民小説を、絵画資料としては、明和より文政年間に至る20名の絵師の浮世絵の他、小袖模様の染見本帳である雛形本、先にあげた小説類の挿絵を用いて考察を進めた。

結果　「裏模様」の小袖は、表は無地又は縞柄が主であり、裏の袵裾から裾廻し（時には袖口）に模様を施したものであった。模様の種類は、青海波・鹿子・紗綾形等多種にわたっており、その技法は縫・織・絞り・描絵等、かなりの贅がつくされていた。流行の時期は、京阪においては寛延年間以前、江戸においては明和から天明を中心として文化・文政年間にまで至っており、上方の豪商から江戸町人の手へと風俗上の主導権が移行する中で「裏模様」の流行が起きていることがわかる。法によって規制されればその盲点をついてどこまでも追求された人々の美的欲求は「裏模様」において「底いたり」、窮まったものと捕えられている。当時の人々は小袖の裏に新たな美の表現の場を見出すと共に、自らの装いによって、「意気なる出立」へと高めてみせようとする意欲を持っていたのである。